

難解な古代史を疫病で検証する

たかみやしんじ

令和3年は寂しく暗く明けた。

令和元年（2019年）の秋から冬頃中国に発した新型コロナウイルスが全世界的に蔓延し終息の兆しが見られない状況であるからである。日本においても令和2年（2020年）の春に第1波、夏に第2波に見舞われ、年末にかけてはそれまでとは異なるレベルで第3波を招来してしまったからである。

このため政府は特に新規感染者数の増勢が強い、首都圏（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）、近畿圏（大阪府、京都府、兵庫県）、中部圏（愛知県、岐阜県）、及び福岡県と栃木県に、1月7日付で「緊急事態宣言」を発出した。「緊急事態宣言」は当初2月7日までの1ヶ月間の予定であったが、栃木県を除いて3月7日まで延長された。そして、首都圏4都県においては更に2週間延長され3月21日迄とされている。今後の推移が懸念されるところである。

これらのコロナ禍のため、通常1月2日に皇居で行われる令和3年の「新年一般参賀」は中止されることになった。また、2月23日の「天皇誕生日一般参賀」も取りやめとなってしまった。

令和3年（2021年）は、令和2年に予定されていた東京オリンピック・パラリンピックが1年延期されて開催される年である。こちらも計画どおり開催できるかどうか懸念されているが、昨今の非公式の情報では外国人の観客の制限については3月中に、観客数の上限については4月中に判断するとされている。

2021年3月12日時点の全世界の感染者数は118百万人、死者数は260万人を超えている。同じ時期の日本国内の感染者数は444千人、死者数は8,400人となっており、前代未聞の数字となっている。

そもそもこのコロナウィルスの発生源は何であったのか。2021年の2月にWHO（国連の世界保健機関）が中国武漢市に入ることができて調査が進められたが、このような時期に調査に入ってもどこまで精査できるのか端から疑問視されている。

このコロナウィルス、そもそもは「コウモリ」が感染源とされているのだが、「コウモリ」から人間にウィルスを媒介した中間宿主として、WHO ではセンザンコウを指摘している。このセンザンコウ、全身がウロコで覆われた哺乳類で、中国では肉が珍味として食用されている。また、ウロコが喘息やがんに効くと信じられているという。

中国では今回のコロナウィルス蔓延の以前にも、SARS といわれるコロナウィルス感染症が2002年に発見されている。世界的な流行が起こり、世界の国々で8,000 例以上の症例が報告されている。直接の感染源はハクビシン（ジャコウネコ科）だったと推定されているが、自然界で SARS ウィルスを保有しているのは「コウモリ」であるとされている。

さて、問題はこれらの「コウモリ」や中間宿主の動物たちの活動が何ゆえに活性化してしまったのかということである。それは近年の中国における急速な近代化、言葉を変えて言えば急速な開発による自然破壊による生態系の崩壊が指摘されるだろう。即ち、「コウモリ」が安心な住処を侵されることによって広範に活動せざるを得なくなる。そのことによって中間宿主の動物たちにウィルスが転移してゆく機会が増幅されていったということなのではなかろうか。

実は、これと同じようなことが中国の漢の時代にも起こっていたのである。中国の漢代には長期にわたって疫病が頻発していた。それは鉄の需要が高まることに応じて、鉄生産に必要な樹木の伐採が急速に行われたことが指摘されているのである。そしてまた、樹木の伐採は貯水能力の低下を来し河川の洪水の頻発をも招いてしまった。これらの自然破壊が生態系の崩壊を招来し、ひいては疫病が頻発することとなってしまったのである。

この疫病の頻発は所謂「黄巾の乱」を引き起こした一つの要因とも言われており、やがて漢の時代が終焉、三国時代に移って行くこととなる。しかしながら、時代が変わっても疫病の原因が療治された訳ではなく、以降においても疫病の多発は続かざるを得なかったのである。

本稿ではこの古代の疫病の多発と蔓延ということに焦点をあてて、これまで難解とされてきた幾つかの古代史の解明に迫ってみたい。

何故ならば、疫病が多発した漢代から三国の時代には、中国や韓半島から多くの人々が日本に渡来してきていた。また、日本からも中国や韓半島に訪れ人事交

流、経済・文化交流が盛んに行われていたと考えられるからである。そして、これらの交流は日本に高度の文化や技術をもたらしたのであるが、同時に人々に帯同して疫病も流入してくることになり、日本においても疫病が流行する事態になってしまったと考えられるからである。

そしてまた、その疫病の流行の時期が「古事記」や「日本書紀」そして「後漢書」、「魏志倭人伝」の描く日本の国家形成の時期と時代が重なっていると考えられるからである。

<後漢書・疫病流行の記録>		<後漢書、魏志倭人伝>
・ 建武 1 3 年 (AD37)	楊徐部大疾疫 (五行志注)	
・ 建武 1 4 年 (AD38)	会稽大疫 (孝武本紀)	
・ 建武 2 6 年 (AD50)	郡國七大疫 (五行志注)	AD57 奴国金印授かる
・ 元初 6 年 ((AD119)	会稽大疫 (孝安帝本紀)	AD107 倭国王帥升等貢獻
・ 延光 4 年 (AD125)	京師大疫 (孝安帝本紀)	
・ 永建元年 (AD126)	11 月疾疫 (孝順帝本紀)	
・ 元嘉元年 (AD151)	京師疾疫 (孝桓帝本紀)	
・ 延熹 4 年 (AD161)	正月大疫 (孝桓帝本紀)	
・ 延熹 9 年 (AD167)	有旱水疾疫 (孝桓帝本紀)	
・ 建寧 4 年 (AD171)	3 月大疫 (孝靈帝本紀)	
・ 熹平 2 年 (AD173)	春正月大疫 (孝靈帝本紀)	
・ 光和 2 年 (AD178)	春大疫 (孝靈帝本紀)	
・ 光和 5 年 (AD182)	2 月大疫 (孝靈帝本紀)	
・ 中平 2 年 (AD185)	春正月大疫 (孝靈帝本紀)	(AD190 ? 卑弥呼共立)
・ 建安 22 年 (AD217)	是歲大疫 (孝獻帝本紀)	AD238 卑弥呼朝貢

検証 1、天孫降臨と東征の真実

首露王という人物がいた。金官加羅国の始祖と伝わる古代朝鮮半島の王である。「三國遺事」によれば、紀元 4 2 年に亀旨峰に降臨し以降 1 5 8 年間国を治めたとも伝わる。妃は許黄玉で、インドのサータヴァーハナ朝の王女でインドから船に乗って伽耶に渡来し、首露王と出会ったのだという。

この首露王の降臨譚が記紀の天孫降臨神話の元になっているというのである。

国譲りによって地上界の支配が確定すると高天原の神々は統治者を派遣することになり、天照大神の孫のニニギが任命され筑紫の日向の高千穂峰に降り立ったのだった。これを天孫降臨というのである。

その後ニニギの後裔のイワレヒコ（後の神武天皇）が東征に旅立つ。白肩の津に泊まった時登美（大和）の豪族ナガスネヒコの攻撃に進路を阻まれてしまう。ある日のこと、ニギハヤヒという神が訪ねてくる。そして、天から降臨した証拠の宝物を差し出してイワレヒコに従うこととなる。「先代旧事本紀」によれば、ニギハヤヒは高天原から天の磐船に乗って河内国に降臨した。後、大和のナガスネヒコの妹を妻とし一族の長として当地を治めた。イワレヒコがやってくると服従を示さないナガスネヒコを殺害し支配地をイワレヒコに差し出して服従したのだった。

この記紀の天孫降臨神話、従来から幾つかの謎が指摘されている。一つは国譲りによって地上界の支配が確定したのに何故大和に降臨しないで日向に降臨したのかということである。また一つは東征の目的は何かということである。「古事記」によれば“日向国は端すぎる。天下を治めるには東の国がよい”ということなのだが、甚だ説得力に欠けると言わざるを得ない。また東征があったとすればそれは何時の時代のことなのかという問題である。「日本書紀」に基づけば神武天皇の即位は紀元前660年とされるのだが、殆どの歴史家がそのようには考えていないはずである。

では、謎の解明に話を進めよう。まずは天孫降臨であるが、先に記述のように天孫降臨はニニギの降臨とニギハヤヒの降臨があった。降臨というのはある一団が降臨した土地に勢力を築くということであるから、ニニギはどこからか出でて日向に勢力を築いた。ニギハヤヒはどこからか出でて大和に勢力を築いた。そして、ニギハヤヒは船に乗って移動して降臨したというから、どこかの海神族に関係する一団であったと推量される。ニニギは陸路で移動して日向に降臨した。

この頃、紀元前後から2世紀頃、ある地域を治めようとして降臨する程の勢力が形成されていたのは北九州地区の可能性が大きい。であるならば、ニニギの出発地は北九州が濃厚な推量地となろう。そして又、ニギハヤヒの出発地も北九州の可能性を秘めている。

さて、この頃（紀元前後から紀元2世紀頃）は、先に記述したように中国では疫病が断続的に流行していた。そして、中国や朝鮮半島と北九州地区との交流が盛んな時期だった。そうした人的交流や経済交流から疫病も渡来して北九州地区で蔓延したであろうことは想像に難くない。

そのように考えると、ニギハヤヒの降臨は疫病を逃れようと東の安住の地を目指した北九州の海神族のことだったということができよう。そして、その海神族の一団は数多くの一団が東を目指したのだろう。各地にその痕跡を残していることがそのことを語っている。それらの中でもニギハヤヒの降臨は日本古代史形成の上で特筆すべき一つであったのだろう。だから、記紀などに取り上げられることになるのである。

また、ニニギの降臨も疫病を逃れようと北九州から日向の地など南九州を目指した多くの一団の一つであったと考えられる。そして、こちらも日本古代史形成の上で特筆すべきことだった。だから記紀にも描かれた。更に記紀ではこの二つの降臨が合体するようなニュアンスで描かれているのである。あたかも、インドの女王が船に乗って渡来したということの逆、船に乗って飛翔したニギハヤヒのもとにニニギの後裔のイワレヒコが入るという構成になっているのである。

これらの話は本当だろうか。順次明らかにしていくこととする。

検証2、高地性集落の謎

高地性集落は弥生時代に形成された。弥生時代中期（紀元前1世紀から紀元1世紀頃）には瀬戸内海沿岸地域と大阪湾岸に、弥生時代後期（紀元1世紀中頃から紀元3世紀中頃）には近畿地区中心に分布している。そして、高地性集落は平地との標高差が数十メートル以上あり平野や海など周囲を眺望できる山頂や丘陵の尾根などに造られたものと概念づけられている。

また、この高地性集落、焼け土を伴うことが多いことからそれが狼煙台の跡と推定されているが、平地の遺跡と同等の遺物が発見されており単なる監視所・狼煙台ではなく長期間住居を構えた場所だったことも明らかになってきている。

こうした高地性集落は平地における環濠集落と共に弥生時代の代表的な集落の形態とも言われている。そして、共に国家形成過程における集落防御の軍事的側面が反映されているとも言われている。確かにこの二つの形態を合体させる

と、武士の時代（室町時代以降）の天守とお堀を伴う”城“のイメージと重なってくる。

では、狼煙台とは一体なにを意味するのであろうか。一般的には狼煙^{のろし}は危急を知らせたり、何かの合図を知らせるということであろう。従来、高地性集落は戦争時の避難場所として安全であり、少人数でも守りやすいなどのことから軍事的防塞的集落として考えられてきた。この場合の狼煙は敵の襲来を早期に平地の民に知らせ防御体制を敷いたり、女子・子供は安全な場所に退避する合図ということになる。

しかしながら、近隣国との覇権戦争だとした場合、敵国からの襲撃の頻度やタイミング（夜討ち、朝駆けなど）を考えると悠長に狼煙を挙げて合図している余裕がないように思える。又、北九州など西国からの侵略に備えたものであるとした場合、今度は逆にその頻度が少なく思えてくる。年間数回あるかないか分からないような襲撃に備えて見張りを置き、狼煙を上げるというようなことが現実に行われていたことが想像しにくいのである。

実はこの頃の瀬戸内海の国々では西の国の人々が攻めてくることよりも恐れていたことがあった。それこそ疫病の蔓延に対する恐れだった。それまで安全な国だったので疫病の恐れなど考えたこともなかった瀬戸内の人々である。ところが、西の国の人からの疫病の伝播の恐怖は次第に瀬戸内海の国から国へと伝わっていった。そして、いつしか国々は申し合わせたように西の国の船が海を通ると狼煙を挙げて合図しあうようになった。そして、国人は狼煙が上がると高地の安全な場所へと避難したのである。

前述のように高地性集落は弥生時代中期の瀬戸内海と弥生時代後期の近畿地区に分布している。この二つの時代の高地性集落は同じような形態ではあるものの、その成り立ちには異なった意味があったのである。即ち、瀬戸内海の国々の高地性集落は疫病を恐れた人々が考案して構築したものだ。又、弥生時代後期の近畿地区の高地性集落は、これこそ敵襲に備えたものだ。この時期、九州から近畿地区にかけて日本が統一に向けて動き出した時期だった。各国による覇権争いが活発化した時期だった。そして、近畿地区を制する者こそ日本を統一する者だった。だから近畿地区が大きな覇権争いの舞台となったのである。

さて、ここで検証1との整合性を説明しなくてはならない。既に薄々気づかれているとおり、弥生時代中期の高地性集落の構築は既存の住民によるものであ

った。そして、そこにニギハヤヒに代表されるような疫病を逃れて安住の地を求めて東に向かう海神族がいた。これらの海神族は時には瀬戸内の先住の国々に立ち寄ったり、或いは征服したりということがあった。しかしながら、彼らの中にも疫病を帯同する一派がいたことは想像に難くない。このことが瀬戸内の高地性集落構築の最大の要因だったのである。

それでは、イワレヒコの東征はどのように理解すべきなのであろうか。イワレヒコはやがて神武と名乗り初代天皇となるのであるから、弥生時代後期において近畿地区で日本統一を目指して覇権を争ったできごととして整合性がある。しかしながら、このイワレヒコの東征と神武天皇の誕生譚は通説では史実とは考えられていない。二代の綏靖天皇から九代の開花天皇までを欠史九代と称しこの実在を疑い、神武天皇と崇神天皇を同一視する説が有力視されているからである。このことについてはやがて明らかにする予定である。

しかしながらニギハヤヒの正体についてはここで明らかにしておく。結論を先に述べれば、それはスサノオの子の大歳尊ということになる。この大歳尊、スサノオと大山津見神の娘・神大市比売との間に生まれるのだが、スサノオと天照大神との誓約で宗像三女神が生まれていることなどから、宗像海神族との関係も切り離せない。兵庫県には400社にのぼる大歳神社が鎮座するという。このことの意味するのは、九州から近畿を目指した大歳尊がこの地に一大勢力を築いたことを示す。そして、先に紀ノ國に着地した同じくスサノオの子五十猛命と呼応して大和を攻略したものと構想できる。このことが記紀ではニギハヤヒの天孫降臨、イワレヒコの東征譚として描かれていると理解できるのである。

大山津見神は大綿津見神と並ぶ渡来系の二神と考えている。大綿津見神については奴国を興した安曇海神族で、中国江南地区からやってきた呉の末裔と考えられている。問題は大山津見神であり、余り唱えられている説を見受けない。しかしながら、ニニギと結ばれる木花之佐久夜毘売は大山津見神の娘であるし、スサノオのヤマタノオロチ退治後結ばれるクシナダヒメも大山津見神系である。

ということは、大山津見神こそ天照大神とスサノオという日本古代史形成の二大系統に共通する祖神ということになる。しかしながら、記紀においてはこの大山津見神の系統は皇統譜から消されてしまうのである。この理由については後の検証で明確にして行きたいと考えている。

検証 3、崇神朝の疫病

ここの検証で明らかにしたいのは崇神朝がどこにあったかということである。どこといっても、弥生時代はまだ九州から近畿地区までが先行発展地域であったことから、この区域に限定していいものと思われる。そして、従来の説からすると大和が主流説ということであるが、本当にそれでいいのだろうか。

崇神朝の時代に国内に疫病が流行した。そして、記紀の語りを総合すると、それは“出雲の祟り”だというのである。この「国内」とはどこかという問題である。紀では“御肇國天皇（はつくにしらすすめらみこと）”とされ、広域に国を統一したと記される。そして、四道将軍の東国派遣は疫病終息後のことだから、疫病的に流行している頃は近畿地区まで。そして、出雲の祟りで三輪山にオオモノヌシを祀ったというから、大和を中心に西は出雲までは範囲と考えてもよさそうである。ところが、魏志倭人伝では倭人の国は朝鮮半島南端から九州島が範囲と記述している。そして、海を渡ったその東は倭種の国と記述しており、倭人国は九州島が中心としているのである。

先ずは崇神朝の時代に“出雲の祟り”で疫病が流行したということであるが、既述のように疫病的に流行は史実としてよいものと思われるので、問題は記紀が“出雲の祟り”がその原因としている点である。この頃の出雲に起こった大事件といえば、オオクニヌシの国譲りが先ずは想起される。そして、考古学的には出雲地方中心に遺っている四隅突出型墳丘墓、この築造が突然のように無くなりその時期から通常の前古墳が築造されるようになったことである。このことは出雲地方に大きな政変があったことを示すものと考えられている。仮に、オオクニヌシの国譲りが記紀の描くような禪譲ではなく、ある勢力による出雲王権の大虐殺であったとすれば、四隅突出型墳丘墓が突然に築造されなくなったことや出雲の祟りの理由が明確となるのだが、果たしてどうであったのか。以降において、この大命題を解くと共に崇神朝の（宮城の）場所を探求してゆきたい。

手がかりは景行朝にある。第12代景行天皇は第10代崇神天皇の孫にして第11代垂仁天皇の子である。紀によれば景行12年、九州の熊襲が朝廷に背いたので天皇は自ら九州に向かい、以降7年をかけて九州征伐を敢行し19年に大和に戻っている。この紀の記述を採れば崇神朝は九州から近畿地区を束ねて

いたかのように思われるのだが、天皇自ら九州地区に7年間も征伐に赴くということが不自然である。ここは崇神朝が九州地区にあった、それほど大きくない勢力であり、景行朝の時に九州地区内に争乱が生じたのでこの沈静化に努めたと解したほうが自然ではないだろうか。そして、九州外の出雲、大和、東国などにも多くの勢力が萌芽しつつあったのではないかと思われるのである。

記では景行朝においてヤマトタケルの大活躍が記述される。九州クマソタケルを打ち破ったヤマトタケルは大和への帰路、出雲イズモタケルを騙し討ちにしてしまうのである。この話もなんか変である。崇神朝において出雲の祟りを鎮めて疫病を終息させたのに又出雲の王族の虐殺を行うという流れは自然ではないのであり、ここにも記紀の記述の大きな絡繰りがあるのではないだろうか。

この景行朝とヤマトタケルの活躍譚は、実はある勢力の史実を語っていると考えられるのであるが、これについては後に詳述するのでお待ちいただきたい。

さて崇神朝の所在地を検討するにあたって、次の「日本書紀」の記述に注目しなくてはならないと考えている。「日本書紀」崇神紀6年の記述では、“天皇の住む宮殿には、天照大神と倭大国魂神の二柱が並べて祀られていた。この二柱の神は勢いが強くて畏れ多くて共に住むのが落ち着かなくなる。そこで天皇は、天照大神を豊鍬入姫命につけて倭の笠縫邑に祀る。倭大国魂神には淳名城入姫をつけて祀ることにする。しかし淳名城姫は髪が抜け落ちて祀ることができなかった。続いて崇神紀7年の記述では、“（国内の災害を憂えた）天皇は八十萬に占いで問うと、倭迹迹日百襲姫神が憑かりて言った。「若しも私を敬い祀れば、必ず国を平穩にしよう」。天皇がそのように教えてくれるのはどこの神かと問うと、「私は倭の域内にいる神、大物主神という」と答えた。（しかし、教えの通りにしたが効果は出なかったので）天皇が夢の中で教えを請うと、大物主神が現れて、若し我が子オオタタネコに私を祀らせれば国は平穩になる。又、海外（わたのほか）の国があり自然と従うであろう。”

天皇の宮殿に住んでいた一柱・天照大神は、孫のニニギからイワレヒコ（神武天皇）に連なる系統だから特段の疑問はないのであるが、問題は倭大国魂神である。これを神話時代の大物・スサノオとしていいものかどうかである。本稿の前段においてスサノオと大山津見神の子・神大市比売との子である大歳尊について論じた。大歳尊はスサノオの意志を継いで九州を出て瀬戸内海を制し、ニギハヤヒと名乗って畿内に降臨し、ナガスネヒコを破り「大和国」を建てたのだっ

た。以上のことを別の表現をするならば、記紀の記述の上での初代天皇はイワレヒコ（神武天皇）で、その祖先神が天照大神である。しかしながら、史実の上では、「大和国を建国した大歳尊が初代天皇であり、その祖先神がスサノオということになる。いずれにしても、天皇の宮殿に住んでいた二柱を追い出したことは、その二柱に代わる大神、即ち、卑弥呼が現れたことを述べていると解すべきなのである。

記紀の記述では、疫病の終息のためにオオモノヌシを大和の三輪山に祀ったということであるが、それは史実ではなかった。疫病は九州で蔓延していたと考えるべきであり、オオモノヌシを三輪山に祀ったことは別の事象のことを著しているのであろう。史実は九州地区で活躍した卑弥呼を九州地区のどこかに祀ったというふうに構想できるのである。では、それは九州のどこであったのか。検証を順次進めて参りたい。

検証4、倭国大乱の原因

日本の古代には「倭国大乱」と言われる時期があった。「後漢書」東夷伝倭条の記述では、“後漢の桓帝・靈帝の時代（146年～189年）倭国が乱れた。長いこと王が居なかったが卑弥呼を共立して王に立てた。これによって収まった。”又、「三国志」東夷伝倭人条の記述では、“其の国、本亦男子をもって王となす。住ま ること70～80年、倭国乱れ相攻伐すること歴年、すなわち共に一女子を立てて王となす。名を卑弥呼という。”“鬼道に事え能く衆を惑わす。年已に長大なるも夫壻なし。男弟ありて佐けて国を治む。王となりてより以来見る有る者少なし。婢千人をもって自ら侍らしめ、ただ男子一人ありて飲食を給し辞を伝え居るところに出入りす。宮室は樓觀・城柵巖かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す。”

以上の記述から、倭国が大いに乱れたのは概ね146年頃から189年頃であり、卑弥呼が倭国王に共立されたのが190年前後のことであったものとしていいのではないだろうか。では、70～80年男子王によって治められていた倭国が大いに乱れたのは何が原因であったのか。その答えは鬼道に事える卑弥呼の共立によって収束したことにあるものと考えられる。強力な軍事力を背景にしたものでなく、鬼道によるものであった。となれば、疫病の蔓延しか答えは求められないだろう。中国のこの時期は大疫が頻発した時期だった。そして、

日本と中国・朝鮮半島との交流が盛んになってきた時期だった。そして、先進文化と共に日本に疫病が入ってきて蔓延してしまったのだろう。このことによって生存をかけた戦いが、隣国から隣国へ更に 又隣国へと広範に繰り広げられることになったものと推論されるのである。この頃、疫病を治療する医薬は未だなかった。従って、祈りに期待するしかなかったのであろう。そこで“鬼道に事え衆を能く惑わす”卑弥呼が女王として共立されたのである。では次に、この漢籍に記述される倭国とは日本列島のどこのことかという問題である。表現は不適切かもしれないが、この時期疫病を帯同して中国から多くの人々が渡来してきた。この渡来先は当時の玄関口ともいうべき九州地区しか考えられないだろう。九州地区や山陰・瀬戸内を越えていきなり畿内ということは考えにくいのである。ということは、共立されたのであるから卑弥呼も九州地区の女王とされなくてはならない。即ち、邪馬台国は九州に所在したということになるのである。

さて、邪馬台国卑弥呼によって連合された倭国であるが、国々には様々な呼称による官職が置かれる。しかしながら、それまでは王や首長によって統治されていたものと考えられるので、全ての国に卑弥呼の号令が届くとは考えにくいのである。そこで想起されるのが卑弥呼の代役の存在である。卑弥呼の死後突然に宗女・台与が登場するのであるが、実は宗女は卑弥呼の代役として国々に配されていたのではないかという仮説を立ててみた。卑弥呼の周りには婢千人が配されていた。であるならば、国々に宗女を配するのは極く自然なことだったのではないかと考えられるのである。魏志倭人伝においても「何かを命令したり行うに当たっては骨を焼き占う」と記述される。国々においてこれを行っていたのが宗女と考えられる。卑弥呼一人で広範な国々に全て号令できるはずがなく、宗女の存在があってはじめて可能となるのである。また、疫病に怯える国々にあって宗女の存在なくして国の安定は期待しえなかったのではないだろうか。そして、伊都国に設置された実務を取り扱う「一大卒」と補完しあいながら連合国を統治していたものと思われるのである。

官職についてももう一つ検証しなければならない事項がある。それは、対馬国・一大国・奴国・不弥国に設置されていたという「ヒナモリ」である。「ヒナモリ」は多くの古代史家が防衛隊のようなものと指摘している。この防衛隊が対馬、壱岐、博多、飯塚に設置されていた。あたかも海陸の防衛ラインのように思われる

のである。となれば、このラインの東に敵国があって、しかも連合国をあげて対峙しなければならないような強力な国であったのである。

実は、この頃出雲に一大勢力が築かれた。そして、彼らは見たこともないような四隅突出型墳丘墓を造るような異教の集団だった。その人たちが九州に船で進出してきた宗像あたりに拠点を築いた。そのような集団は到底受け入れられるようなものでなく、遂には戦争状態になってしまうのである。連合国が防衛ラインを設置したのはこのためだった。

このことを魏志は“倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず”と記述するのである。この狗奴国の比定地をめぐるも、邪馬台国の比定地と同様に諸説が展開されているところである。主流説は邪馬台国の南、熊本県菊池地方とするのであるが、卑弥呼の共立に組みしなかったことから疫病の蔓延した九州地区とはし難いのではないだろうか。「後漢書」には“女王国より東、海を千里渡ると狗奴国に至る”と記述されており、南ではないが、狗奴国＝出雲とする方が整合性が高いと思われるのだからいかがであろうか。

検証 5、神功皇后と武内宿禰

神功皇后は第 14 代仲哀天皇の皇后で、仲哀天皇崩御から第 15 代応神天皇即位まで摂政として約 70 年間君臨したとされる。第 9 代開花天皇の流れを汲む血統である。既述のように第 10 代崇神天皇から第 12 代景行天皇が九州朝であったとするならば、その流れを汲む神功皇后も九州朝である可能性が濃厚である。ここの検証はそのことがテーマの一つである。そして、神功皇后に寄り添うように支えた武内宿禰。第 12 代景行朝から、第 16 代仁徳朝に 300 年にわたって仕えたという伝説上の怪物である。非実在説も有力とされるのだが果たしてどうであったのか。二つ目のテーマはこの武内宿禰の正体を炙り出すことである。

イ) 神功皇后の遷都

第 12 代景行天皇の崩御後、子の第 13 代成務天皇が即位するが、男児が生まれず直系が途絶えてしまう。そこでヤマトタケルの子のタラシナカツヒコが第 14 代仲哀天皇として皇位を継承すると記紀に記述されるのだが、そもそもヤマトタケルの活躍譚が疑わしく、従ってヤマトタケルの実在も疑問視されてい

る。となればその子の存在も大いに疑ってかからなければならない。

即位2年、神功皇后を妃とする。ある日熊襲が再び朝廷に背いたので共々この征伐に向かう。しかしながら、その時下された神託に従わなかったため翌年崩御してしまう。一方神託に従った神功皇后は、熊襲を征伐した後新羅に遠征（この時身重だったという）、百済など朝鮮すべてを服属させたのだった。そして、新羅から帰還後筑紫においてホンダワケ（後の応神天皇）を産んでいる。

さて、この神功皇后譚をどのように理解したらいいのだろうか。まずは最初に想起されるのは景行天皇のところで論じたように天皇（皇后）自ら熊襲征伐に向くことの不自然さである。このことは仲哀朝、或いは神功皇后においても九州に拠点を置いていたのではないかと疑わせるに十分である。魏志の記述では、“卑弥呼の死後男王たてしも國中服せず”、そこで、“宗女台与をたてる”となっている。これを記紀の記述に置き換えると、“熊襲が再び朝廷に背いたので征伐に赴くも、仲哀天皇は（疫病で）急逝する。そこで神功皇后がたち差配する”ということになる。

次の疑問は神功皇后が新羅遠征を行ったことであるが、これも考えにくい。しかも身重とわざわざ記述しており、これを否定しているかのようである。他の誰かの事績を置き換えている可能性もあるのではないかと疑わせる。可能性として推定できるものが一つある。それは卑弥呼の朝貢である。卑弥呼の朝貢団は先ずは帯方郡に詣でた。そして、更に許しをもらい京都（洛陽）に詣でた。こころ辺のことが置き換えられて記述されていると考えられるのである。

また神託の不思議である。この神託は住吉三神から発せられたことが明らかとなる。何故に住吉三神から新羅遠征の神託が下されねばならないのか。住吉三神はイザナギが生んだ後神功皇后譚まで登場しないので正体は不祥である。しかしながら、同時にイザナギから生まれた海神であり、一方がワタツミ三神であるならば、ツツノヲ三神（住吉三神）は大山祇系と考えるべきではないかと思う。このことを裏付けるように古事記では住吉三神が神託するのは天照大神の思し召しだと記述されるのである。思い返せば、天照大神の孫のニギギが一目ぼれしてしまうのが木花之佐久夜毘売、オオヤマツミの娘だったのである。

さて、神功皇后が台与であったとすると歴史はどのように展開したのであるうか。既述のように崇神朝の時宮殿に祀っていた天照大神とスサノオを宮殿の

外に出したのだった。それは出雲の祟りを鎮めるためだった。そして、そのあとに宮殿に祀ったのは卑弥呼ではなかったかと構想した。そのことを思い出しながら記述を進めていこう。

崇神朝は疫病が蔓延した九州地区にあったとした。そして、ヤマトタケルや景行天皇の熊襲征伐の拠点が豊前・豊後界限であることから、宇佐に照準が当てられるのである。大分県宇佐市には豊前国一之宮、宇佐神宮が鎮座する。現在祭神として祀られているのは八幡大神（応神天皇）、比売大神（宗像三女神）、神功皇后の三柱である。

この宇佐神宮、「八幡宇佐託宣集」によれば大分八幡宮（福岡県飯塚市）が本宮と言われる。又、大分八幡宮は宮崎宮（福岡県福岡市）の元宮とも言われる。これらの伝承が示すことは、宇佐神宮の本貫地が北九州地区から宇佐地区に移ってきたことを言っているのであろう。しかしながら、応神天皇、神功皇后と一緒に祀られているのは宗像三女神である。住吉三神が祀られていないで宗像三女神が祀られているということは何を意味するのであるか。このことを理解するには宗像三女神と住吉三神が同根であると考えより他はなさそうである。

どういうことか。それまでの宇佐神宮に祀られていたのは、スサノオ（倭大国魂大神）と天照大神、そして比売大神だった。そして、ある事変によりスサノオと天照大神に代わり祀られたのが応神天皇と神功皇后だった。

どういう事変であったのか。それは神功皇后が伊都国を離れ、宇佐に遷都したのではないかと構想することである。疫病が流行する北九州を逃れるということが一つの目的であり、もう一つ考えなくてはならなかったのが宗女台与として卑弥呼の墓を造ることだった。

宇佐の地は天照大神を仰ぐ勢力が残る地であり、この地を席卷することで九州地域を纏めようとしたのであろう。そして、旧来の勢力を京都の丹後地方に追いやるのである。このことを記紀は天照大神を宮殿から出したと既述したのであろう。実は豊後と丹後には幾つかの地名が一致することが研究されており（豊後から丹後にある勢力が移動した）、このこともこの推論を後押しするのである。

一方、神功皇后は倭大国魂大神をも追い出すのであるが、こちらは大国主出雲を倒壊させたことを言っているのであろう。この頃出雲中心に山陰地域では四隅突出型墳丘墓が盛んに築造されていたのだが、ある時期以降ぱったりと築造が行われなくなり、暫くすると大和と同じ古墳が築造されるようになった。この

政変こそ武内宿禰による出雲の駆逐の物語であろう。古事記の記述ではヤマトタケルによってイズモタケルが騙し討ちにあい討たれてしまうのであるが、この場面を鮮明に思い出されないだろうか。武内宿禰＝ヤマトタケルと構想することで、史実が見えて来ないだろうか。これについては後述する。

さて、神功皇后（台与）の一番の課題は卑弥呼の墓を築造することだった。その仕事は宗女の棟梁としての責務そのものであった。そして、その場所はそれまで天照大神を祀っていた場所、即ちそれまでの宇佐神宮ということになるのだが、そう結論づける前に幾つかの前提となる事項を片付けておかななくてはならない。

先述のように女王国には各国に宗女が配されていた。そして、卑弥呼がその頂点に立つ者だった。このことの意味するのは各国が同様の宗教観をもっていたからであり、だから卑弥呼が立つことにより乱が収まったのである。そして、乱れた倭国は北九州地区であり、中国江南からの渡来系の人々が勢力を築いたのであるとすれば、その宗教観とは道教的なものであったものと考えられる。その後、各国の首長が勢力を増し、やがて王家を形成するようになるとその墓も勢い大型化されることになる。魏志倭人伝では卑弥呼の墓は“径百歩”と記述されるのである。

では、“卑弥呼が都した”ところとはどこのことであったのか。魏志倭人伝の記述ではその場所は明らかにはならない。又、魏志倭人伝の記述では帯方郡の使者等は、卑弥呼の都に行っていないし卑弥呼に直接は会っていないものと考えたほうが自然である。若し、卑弥呼の都が伊都国に近かったら卑弥呼に会えないまでも、都までは行けたはずである。卑弥呼の都は伊都国から極めて遠方にあり、とても簡単に行けるところではなかったのである。

この“卑弥呼が都した”ところを、記紀の編者たちは必至に考えた。当時（紀元700年前後）には現在よりはるかに多くの漢籍に触れることができたはずである。それらを読破した記紀の編者たちが結論として著したのが天孫降臨の地だった。そこは筑紫の日向の高千穂の久士布流多気だった。そして、ニニギはそこに天高く千木をそびえさせた“日向の宮”を造ったと記述した。

以上から卑弥呼はニニギの後裔ということになる。そして、卑弥呼が育ったのは“筑紫の日向の高千穂の峰”界隈だった。ここでいう筑紫とは九州島のことであろう。九州島の東部に邪馬台国があったと記紀は言っている。そこに卑弥呼は居

た。しかしながら、記紀の編纂方針から卑弥呼の素性を明かすことはできない。そのような事情から卑弥呼は記紀の記述から外されることになってしまうのだった。

ロ) 武内宿禰の正体

前項で武内宿禰＝ヤマトタケル論を若干記述した。既にご存じのとおり、ヤマトタケルは景行紀において熊襲征伐、出雲征伐、東夷征討などをやってのけた英雄である。武内宿禰は景行紀では北陸・東国を巡察、成務紀では大臣となり神功皇后と共に九州・新羅遠征、その後も応神朝・仁徳朝まで生き抜いたとされる大物である。この二人、非常に似通った英雄譚が展開されるので多くの同一論が提出されているのであるが、未だに決め手がないのが現状であろう。しかしながら、ヤマトタケルが景行天皇の子とされていること、武内宿禰が皇統でないことが決定的なことであり、このことに解明の手掛かりがある。

武内宿禰は、本人が景行天皇から仁徳天皇までの5代にわたって仕えた忠臣として描かれ、また、紀氏・巨勢氏・平郡氏・葛城氏・蘇我氏など中央有力豪族の祖とされる。この忠臣ということであるが、記紀が編纂された頃のことなら理解できるが倭国大乱直後のこと、各国が勢力増強にしのぎを削っていた時代に忠臣という概念がすんなりとは理解ができない。

実は武内宿禰は、「勇猛な、内廷の宿禰」の意とされるのだが、一部研究者によれば「内」は内氏を意味するとの見解がある。そして内氏は九州地区に広く氏族の痕跡を残すのだという。また、「内」を冠した地名は大隅・薩摩半島に集中していることから、この一帯が熊襲族＝武・内宿禰のルーツの地であろうとされている。

前項において、卑弥呼はニニギの後裔と推察した。ニニギの後裔ということは山幸彦の後裔とも言えるのである。「古事記」の記述では兄の海幸彦は弟の山幸彦との確執の後山幸彦の配下となる。そして、海幸彦の子孫の隼人は宮廷に仕えたと記述される。この「古事記」の記述と内氏のルーツを繋げて考えると、海幸彦の後裔こそ武・内宿禰ということにならないだろうか。

以上でみてきたように記紀では武・内宿禰を天皇家の忠臣として位置付けて記述している。これこそ記紀が指向した編纂作戦であり、それは史実ではないと考えなくてはならない。

では記紀が隠した史実とはどのようなことであつたのであろうか。それは記紀が忠臣と描く姿の真逆の姿を想像することで答えが得られるだろう。それは武・内宿禰が神功皇后の脇にいて神功皇后の治績を助けたのではなく、主力は武・内宿禰の治績と考えることだろう。

魏志倭人伝によれば卑弥呼の死後男王を立てるのだが国は治まらない。そこで宗女・台与が13歳にしてこの後を継ぎ漸く治まる。この卑弥呼の死後立てられた男王が仲哀天皇、宗女・台与が神功皇后ということになる。そして、魏志倭人伝には登場しないが、629年に成立した「梁書」に宗女・台与と後に立った男王が西晋に朝貢した記事があるというから、この男王こそ武・内宿禰ということになろう。

宗女・台与の擁立で国が治まったというから、この頃未だ疫病が収束していなかったものと考えられる。祈りと占いが必要だった。しかしながら、13歳の少女が国（政治）を統治できるはずもなく国には首長（男王）がいなくてはならなかったものと考えられるのである。

さて、この項の終わりにヤマトタケル＝武・内宿禰論について少し記述しておきたいと思う。「古事記」では景行天皇の命で熊襲征伐に出向くのであるが、叔母の倭比売命から衣装をもらい女装してクマソタケル兄弟を騙し討ちにするのである。そして死に際にクマソタケル弟から倭建命（やまとたけるのみこと）という名を献上されるのだった。このような説話は虚偽であると記紀の編者は白状している。この説話の心は、武・内宿禰が神功皇后と共に勢力圏の拡大を図ったという話であり、自らの出自である熊襲を懐柔した物語であろう。

また、クマソタケルを征伐した帰路出雲に寄った。出雲ではイズモタケルが権力をほしいままにしていたのでこれを誅す必要があった。イズモタケルと友情を交わした後、ある日イズモタケルと刀（木刀）を交換してから立ち合いを挑み、打ち殺してしまうのだった。このような話も上記同様虚偽の説話である。この説話の心は、邪馬台国と対立していた出雲オオクニヌシ（狗奴国）を武・内宿禰が征討した話として理解しないとならない。

こうして武・内宿禰は熊襲を懐柔し、出雲を征討していよいよ大和に向かうのである。

最後に崎元正教氏が NET に掲載されている「ヤマトタケルは武内宿禰の若き姿」という論文の極々一部を紹介しておこう。これによると、“ヤマトタケルの御子と伝わる仲哀天皇を祀る福岡県香椎宮の宮司はヤマトタケルの後裔ではなく武内宿禰の後裔が任じられ、連綿と香椎宮を奉祀している。『香椎宮御由緒』には武内宿禰の後裔紀小弓宿禰の子孫が大宮司に任じられ都より赴任したとあり、そのとおりに、近くには武内屋敷が現存しており子孫が現在も住されている”という。

検証 6、天智朝と天武朝

激動の 7 世紀。乙巳の変（645 年）に始まる大化の改新、白村江の敗戦（663 年）、壬申の乱（672 年）を制した天武天皇の即位。そして、天武天皇が詔したと言われる「古事記」が 712 年に、「日本書紀」が 8 年後の 720 年に成立した。ここでの検証は、この時代の記紀に著される不思議な記述について、その背景を探ってみたいと考えている。

イ）蘇我氏と物部氏

日本古代史の中で、疫病が大きくクローズアップされる事件をもう一つとりあげてみよう。それは、仏教伝来をめぐる蘇我氏と物部氏の対立の中に著される。

欽明 13 年（552 年）、百済の聖明王から金銅の仏像と経典などが献上される。天皇が仏を祀るべきか臣下に聞いたところ、大臣・蘇我稻目はこれに賛成するが、大連・物部尾輿は神の怒りを恐れてこれに反対する。そこで天皇は蘇我氏に仏像を与える。早速蘇我氏は寺を建てて仏像を祀るのだが、その後国内に疫病が流行する。これを尾輿は異国の神を祀ったためとし、蘇我氏の建てた寺を焼き払い、仏像を海に投げ捨ててしまうのだった。

この疫病の流行というのも史実である可能性が大である。この頃の中国での大疫の流行についての記述が不明ではあるが、それまでの中国からの大疫の伝播から察するに、中国→百済→大和というルートで大疫が仏像などの運搬と共に運ばれてきた可能性が大きいのではないだろうか。

さて、その後も蘇我氏と物部氏の対立は続くのであるが、本質は仏教導入派の

蘇我氏と日本古来の神道の祭祀権を握っていた物部氏との政治の主導権をめぐる争いだったことに注意が必要であろう。

そして又、蘇我氏は武内宿禰に発する家系とされることにも注意が必要である。武内宿禰といえは、神功皇后に寄りそっていた忠臣である。そしてまた、中臣氏は神道系の家柄からして物部氏側についていたことである。これらのことが次に起こる事件の極めて重要な背景となってくるのである。

蘇我蝦夷・入鹿親子の時代になると、甘樫丘に邸宅を築き、「宮門」と呼ばせるなど権力は集中し、専横がますます激しさを増し、人々の恨みも募るばかりだった。これに反発したのが中臣鎌足だった。中大兄皇子(後の天智天皇)と謀り、皇極天皇4年(645年)、三韓(新羅・百済・高句麗)から三国の調の進貢の使者が来日した際、蘇我入鹿が暗殺されたのだった(乙巳の変)。その翌日、蘇我蝦夷は館に火を放ち自殺する。こうして長年にわたり強盛を誇った蘇我本宗家は滅びたのであった

ロ) 齊明天皇の朝倉宮

乙巳の変によって実権を掌握した中大兄皇子であったが、何故か天皇に即位することなく“称制”という形で政治を執る(と書記に記される)。その理由は、白村江の戦いの失敗の責任を逃れるためだったのではないだろうか。そして、大和にいなかった皇極天皇及び重祚して齊明天皇に責任を押し付けようとしたからではないだろうか。

齊明天皇在位5年(660年)、百済が唐と新羅によって滅ぼされる。百済の滅亡とその後の百済の抗戦の中、人質の百済皇子豊璋を百済に送り返す。更に百済を援けるため難波に遷って武器と船舶を作らせる。そして、瀬戸内海を西に渡り筑紫の朝倉宮に遷り戦争に備える。しかしながら、軍が遠征に発する前の661年に当地にて崩御する。

さて、この日本書紀の記述は本当だろうか。古事記が第33代推古天皇までの記述、第34代舒明天皇以降は日本書紀の記述となることも偶然ではなさそうである。すでに何回も記述しているように、天皇みずから大和から九州に征討に向く行為は不自然であり史実とし難いと考えてきた。上記の齊明天皇(女帝)の朝倉宮への遷宮についても同様に考えるべきではないだろうか。では、史実はどのようなことであつたのか。

畿内において権力を掌握した中大兄皇子であったが、船舶を中心とした軍力は北九州朝のほうに頼っていた。そこで、来るべく半島への進軍や半島からの攻撃への備えを北九州朝に委ねたというのが真相ではないだろうか。北九州朝としては、船団を整えると共に万が一に備えて王族を内陸の朝倉宮に遷したのであろう。

ところで中大兄皇子は舒明天皇（皇后は後の皇極天皇）の子として626年誕生とされている。一方大海人皇子は中大兄皇子の弟とされるのだが、書記には生年の記述がないため不明である。先述のように、皇極天皇（斉明天皇）が北九州朝の王族とすれば、中大兄皇子と大海人皇子が兄弟とするのは極めて不整合となる。中大兄皇子は大和国で権力を振るっていたのであるから、大海人皇子は皇極天皇（斉明天皇）と共に北九州にいたと考えた方が合理的である。

実はこの北九州朝の存在を支持するものがある。それは唐による筑紫都督府の設置である。白村江の戦いの後、唐による韓半島から倭の冊封体制は安東都護府（高句麗に設置）、鶏林大都督府（新羅に設置）、熊津都督府（百済に設置）、筑紫都督府（倭に設置）によっていたとする一説の史実性が濃厚である。この一説によれば、唐と戦ったのは北九州朝であり、この筑紫都督府の設置により唐による倭の属国化がなり倭の全面攻略は免れたとされている。

ハ) 壬申の乱

中大兄皇子は667年大津宮に遷都した後、668年に天智天皇として即位する。そして大海人皇子を皇太子とする。しかしながら、671年には御子大友皇子を太政大臣に任命する。この後病に倒れた天智天皇は大海人皇子を呼び後継を託すが大海人皇子はこれを断り出家して吉野に去って行ったのだった。

671年12月天智天皇崩御。大友皇子が実質の支配権を掌握する。そして、大友皇子の軍備の知らせを受けた大海人皇子は672年6月吉野を出立、ここに壬申の乱が勃発したのであった。672年7月瀬田川の激突で近江軍は総崩れ、ここに大津京は陥落し大友皇子は自決、近江朝は滅亡したのであった。

さて、書記の描くこの壬申の乱物語はあたかも後継を拒まれた大海人皇子が

力づくで天皇位を取り戻したがごとの記述であるが、果たして本当のことであつたのだろうか。壬申の乱の史実を明らかにするために前項で記述した筑紫都督府の一説をもとにして検証を進めてみたい。

670年のこと、唐は西のチベットの大军に攻め込まれてしまう。これを聞いた新羅の文武王は好機到来ととらえ唐からの独立戦争に踏み切る。この戦争は6年続いたとされるが、唐は韓半島より西域が重要であつたのか劣勢に立たされ、676年には安東都護府を遼東半島まで後退させ韓半島から完全撤退することになった。この新羅の独立戦争のお陰で、北九州に設置された筑紫都督府は672年には司令官と考えられる郭務儁が日本から帰国。唐は日本の占領を放棄したとみられるのである。

この唐による筑紫都督府の設置は北九州朝の領地や領民を滅亡させるようなものではなかった。北九州朝を唐の属国として管理するような機関であつたのではないと思われる。従って、司令官が帰国してしまうと元の北九州朝が復活することになったものと考えて差し支えないのではないだろうか。このことこそ大海人皇子が北九州朝に温存されていたという構想が成り立ちうる背景と考えられる。そして、大海人皇子は武内宿禰の血を継ぐオオヤマツミ系の王族であつた。名前からして海神族に相応しいのだが、次に記述することがそのことを強く後押しするのである。

一つは長男の高市皇子が、天武天皇と宗形徳善の娘尼子姫との間の子ということである。宗形徳善は飛鳥時代の福岡県宗像地方の豪族であつたとされるのだが、父母など不祥である。しかしながら、宗形徳善の姫を天武天皇が嬪に迎えたとすれば、それは天武天皇が宗像海神族（オオヤマツミ系）と血縁であり、近隣から嬪を迎え入れた可能性を大いに秘めているのではないだろうか。

また、第三皇子の大海皇子の母は大田皇女（天智天皇の長女）なのだが、大海の名は生地である那大津（福岡県博多市）に因むという。斉明天皇の新羅遠征の際、九州に随行した大田皇女の腹に生まれたという。先述のように斉明天皇が北九州朝にあつたとすれば、また、大海人皇子に大田皇女が嫁いできたとすれば、この説はとても整合性がとれているのである。

さて、壬申の乱である。書記によれば大海人皇子は吉野に隠遁していた。そして、671年12月に天智天皇が崩御され、若干24才の大友皇子が後を継ぐの

だが、大友皇子側の軍備の動きなどを察知したことから 672 年 7 月に大海人皇子は吉野を出立、ここに壬申の乱が勃発したのだった。

しかしながら、大海人皇子が吉野に隠遁して吉野から出立したというのだが、本項で推論してきたように大海人皇子は吉野にはいなかった。北九州朝にあって勢力を蓄えていたのである。そして、大海人皇子は九州を出立する。天智天皇の崩御から約半年後のことであり、出立までの時間が長い感もあるが、これは郭務棕の 672 年の帰国が 5 月 30 日であったことに起因するのであろう。これをもって北九州朝は唐の束縛から解放されたのである。

補足説明となるが、先述の高市皇子は壬申の乱の時大津京を脱出して大海人皇子隊と合流した。また、大津皇子はまだ 10 才で、天智天皇の寵愛厚かったというのである。これらのことは、両皇子が天智天皇に人質に捕られていた可能性を示すものではないだろうか。そして、それは天智天皇が娘の大田皇女を大海人皇子に嫁がせた見返りということになろうか。

おわりに

一般的には「古事記」は 712 年、「日本書紀」は 720 年の成立とされている。そして、共に天武天皇が詔のりして編纂が始まったとされるのだが、果たして本当のことだろうか。両書とも藤原氏の全盛の時代に編纂が進められていることから、（藤原鎌足が援けた）天智天皇を倒した（恨みの）天武天皇が編纂した歴史書をそのままに受け継いで完成させたとは考えにくいのである。

天武天皇はオオヤマツミ系の皇統譜を志向していた。そしてある程度のところまで完成していた。「古事記」の元資料集のようなものができあがっていたのではないかと考えている。藤原氏は、これを改ざんしたり、神代を導入したり、記述や表現を物語にしたりして「古事記」を完成させた。更に、藤原氏に都合のいいような歴史書の編纂を命じ、完成させたのが「日本書紀」だったのではないかと考えている。そして、その改ざんの最大の理由は天武天皇をはじめとしたオオヤマツミ系の皇統譜を消したかったことと考えている。次の機会があればそれらのこと取り上げてみたい。

了